

2019 県展 講評

絵画部門

【総評】

全体に粒ぞろいで、丹念、緻密に描かれた作品が多い。一方で、独自性や強いテーマ、現代性を持つ作品は少なく、テーマや狙いが対象を通してしっかりイメージ化されたもの、また自分の身近なリアリティを追求したものが受賞作品となった。高い技術を持つ方はそれに満足せず、技術の高さを崩すようなチャレンジをすることで、より上を目指せると考える。また、今回は長く続けることで完成度を増した作品の魅力がより伝わってきた。若手には、より自分のこだわりを強く出す作品を描いてもらいたい。

【一席 部門大賞・知事賞】

古くからある蓮というモチーフを描きながら、象徴性を帯びた時間の流れを表している。西洋的遠近法にとらわれず、背景と蓮の関係が運動と時間を生み出しているが、そのことが絵画としてのリアリティを増し、力強い空間を作り上げている。

【二席 兵庫県立美術館賞】

画面の密度が非常に高いが、それが平らになるのではなく、前後に振幅して呼吸しているようである。貝をモチーフとして、曼荼羅のような宇宙観が表されている。洋画にも日本画にも無い絵肌で、確かな技術をもってまとめ上げられている。

【三席 神戸新聞社賞】

テーブルの横線と S 字曲線の対比など、絵画としての構成美を身近なもので描ききっている。また、遠近感を崩して対象を描き、チグハグにすることで作品を絵画たらしめている。中心の刺身が過剰に描きこまれており、表現したいものへの作者の熱が伝わってくる。

【四席 (公財)兵庫県芸術文化協会賞】

何かの形をなぞるのではなく、筆触自体が自由に動いていて開放感を感じる。計算に収まらない制作のライブ感があり、作者の高揚していく意識が伺える。かなり自由に作られているが、作品として破綻せずにクオリティは保たれている。

【奨励賞 (公財) 伊藤文化財団賞】

美人画、記号としての人物像ではなく、強い意志を持った生身の人間を表現できている。衣服の表現も印象的で、丹念に描くことで中の人間を描こうとしている。日本画の素材にあぐんでいるようだが、それが逆に未知数の魅力となっている。

彫刻・立体部門

【総評】

例年以上にバラエティに富んだ作品がバランスよく集まっていて見ていて楽しかった。各出品者とも人真似でない個性的表現を追求している点がとても良かった。

【一席 部門大賞・知事賞】

樹脂にアクリルで着色した作品と思われる。森の切り株から少女へと変容するイメージが流麗な曲線や波のようなフォルムで表現されている。技術的にはまだ洗練の余地があるが、少女特有の内気な心情や雰囲気がにじみ出てくるようで、表現したい思いがストレートに出ている。

【二席 兵庫県立美術館賞】

六面体が集まって八面体となり、さらにそれが増殖して大きな八面体を形成するという、今回最も緻密に構成された作品。幾何学的なイメージと曼荼羅や仏塔を思わせる仏教的なイメージが融合されている。日本の伝統建築も想起させ興味深い。

【三席 神戸新聞社賞】

流木という素材のオーガニックな雰囲気と紙粘土で造形されたギリシャ彫刻を思わせる顔の表現とのアンバランスさが面白い。伸びやかな空間性を感じさせる一方、雁字がらめになった現代人の人間関係をも表現しているようにも見える。

【四席 (公財)兵庫県芸術文化協会賞】

建物の瓦礫や残骸を樹脂で固めることで災害の記憶を化石のように封じ込めようとした作品で、メッセージ性を強く感じさせる。素材の扱い方がうまく、本来美しいとはいえないものを美しく見せており、現代美術としての体裁が整っている。

【奨励賞 (公財) 伊藤文化財団賞】

ねぶたの技法を用いた民族工芸的な作品であるが、今後はもっとスケールの大きな作品への展開や彫刻作品としての新しい発想にも期待したい。ただ、おたまじゃくしの尻尾の半透明的な様子などが巧みに表現されている点は評価できる。

工芸部門

【総評】

作品の形とボリューム、技術のバランスがとれていて破綻の無い、堅実に作られた作品が多い印象。制作するにあたって最後まであきらめずに作りこむ誠実さを感じた。昨年度よりも技法のバリエーションが広がったようで、チャレンジする意識も見えて楽しく審査した。県展の工芸部門においては、素材を楽しんで取り組むことに大きなポイントがあるので、出品者は様々なものに挑戦してほしい。

【一席 部門大賞・知事賞】

器の陶芸作品が多い中、ガラスの瓶をモチーフにしていることが面白く、またそれらが引き出しに並ぶ様は舞台のよう。古色の感じや作者の経験・記憶を連想させるタイトルなどが時間の経過を仄めかしており、焼き締め技術ともとても合っている。自然灰の感じがよく出ているので、これは薪窯で作られたのでは？工芸はインスピレーションだけでは足りず、それを実現させるための技術や努力を積み上げていかなければならないが、そういう努力が作品の物量も含め全体に感じられた。

【二席 兵庫県立美術館賞】

工芸は伝統的な技法を使って積み上がってきたものを今の暮らしにアプローチさせなければ生き残れないと言われているが、この作品はまさに「日常で使えるもの」という原点に立ち返っている。シンプルな形でありながら細部にひねりが見えてユニークであり、好感の持てる良い仕事である。未来志向的な印象も持ち、素材の木目を生かして自分の椅子を作ろうとしている姿勢が現れている。今後も継続してこの方向を模索して行ってほしい。

【三席 神戸新聞社賞】

使っている布が珍しい。部分によって素材を変えるなど織りづらいことが予想されるが、綺麗に、丁寧に仕上げている。全体的に色味を抑え、モチーフをシンプルにすることで技術や異なった素材を用いる工夫が際立っている。楕円形のバリエーションが表現できていて、作者の想像力の豊かさ、自由さがよく現れており、その親しみやすさも魅力的である。

【四席 (公財) 兵庫県立芸術文化協会賞】

アイデアを持って完成に至るまでに要素を吟味するなど段階を踏んだように見受けられる。タイトルも面白く、少ない要素で絵画的な距離感を表現するなど工夫されている。花瓶にもなるような形態が街の景色になっている点が面白い。物語性を強くもちながらも説明的でない、工芸性が出ているところが良い。釉薬の微妙な調整やテーピングを使った跡も見られ、作者の経験と技術が現れている。

【奨励賞 (公財) 伊藤文化財団賞】

特にガラスのカット部分など綺麗に仕上げられていて完成度が高い。細部を作りこみながらも、剣と歯の透明感や、切子と頭部の根のような部分につながりができているように一体感もあり、ひとつの造形としてうまく作られている。前作よりガラスの技法を強調しようという意識が出ており、ガラス工芸の将来を模索しているようで可能性を感じる。ガラスの良さがどんどん出てくるとより良いのでは。

書部門

【総評】

漢字、かな、前衛作品がバランスよく出品されており、いい作品が多くあった。調和体もあり楽しく審査することができた。出品作品それぞれはバラエティに富んでいたが、篆刻作品がなかったのは残念であった。今後に期待したい。

【一席 部門大賞・知事賞】

余白を十分にとって墨をしっかりと入れた見応えのある作品。古典でいうと明代末期の張瑞図(ちようずい)の風格を根底に、宋の米芾の表情も垣間見せた格調の高い作品である。

【二席 兵庫県立美術館賞】

第一画の強烈な縦線が左右に展開する構成と線が心地よく、時計の振り子のような形とリズムカルなタッチでよくまとめられた明るい作品である。

【三席 神戸新聞社賞】

全体的にしっかりした堂々たる書きぶりの作品。書き初めは静かな入り方で、後半に見せ場をもってくる構成となっており斬新さも見られる。線も豪快でしっかり書かれている。

【四席 (公財) 兵庫県立芸術文化協会賞】

漢字かな混じりの作品である。誰でも読める作品を鑑賞することは書作品にとって大切なことである。そういった中、本作は力みのない軽やかなタッチで最後までよどみなく淡々と書かれており、筆致の安定度もあいまって楽しく鑑賞できる作品。

【四席 (公財) 兵庫県立芸術文化協会賞】

大胆な筆致で目を奪う構成は非常に巧みである。強弱を加味した筆遣いは妙味をみせて、今後の活躍を予感させるものである。

写真部門

【総評】

応募作品数が多く、全体のクオリティも高かった。頭でっかちにならず、ある種の保守性も見られるが決して安易ではない、出品者の写真に対する関心の高さが表れている。時間をかけて撮影してきたものから良いものを出している印象。派手さはないが、写真の可能性の一端が見えた。県展は老若男女が同じ舞台で平等に表現できる場。より多くの参加者が多様な形で応募してくれることを祈る。

【一席 部門大賞・知事賞】

一目見て惹かれる作品。背景の暗い草むらの中で白馬の筋肉、血管、質感が浮かび上がり、光と影の使い方、コントラストが上手い。対象は馬だが、生きるオブジェとして光と形の相関性がよく表れている。加工せず、写真の原点による表現であることも評価した。

【二席 兵庫県立美術館賞】

写真を撮る光景を撮っていて、写真の面白さ、ありようを捉えて伝える力がある。個々の写真は隙があるが、スナップ写真らしいところがむしろ好印象。満面の笑みで幸せそうに写真を撮る人が微笑ましく、素直に良いと思わせる作品である。

【三席 神戸新聞社賞】

対象となった顔のおどろおどろしい存在感と強い目線、濁った池、池に映る木の影のボケ具合等、画面の中に爽やかさが全くなく強烈なインパクトを与える。これは何だろうと思わせ、何か分かってからも不思議さが残る。怖い、面白い等、様々な見方ができるのも魅力。

【四席 (公財) 兵庫県芸術文化協会賞】

シンプルなシルエットがシャープに出ており、図案的なセンスを感じる。サギは都市部でもよく見かける鳥であるが、この作品のサギは人工物を止まり木の代わりにしており、自然と人工物の対比、共存関係も面白い。

【奨励賞 (公財) 伊藤文化財団賞】

シャッタースピードを上げて、瞬間を捉えた良作。背景をぼかして計算してシャッターを切っており、高い技術を持っている。腕に絡まる泥の水しぶきも印象的。若い作り手にしかできない表現で、エネルギーを感じる。

デザイン部門

【総評】

県展では絵画部門もデザイン部門もあることから、例年、絵画的な作品が多く、絵画とデザインの線引きが曖昧なものが多い。デザインでは、何を伝えたいのか、何を意図したのか読み取れることが最低条件。その上で高いクオリティで表現できたかが評価の大きなポイントとなる。昨年と比較するとデザインとして見ることができる作品が増えたこと、社会との繋がりを意識した作品が出てきたのが良かった。ただ、ジャンルとしてはプロダクトデザインや商業デザインなど多様な表現が含まれているにも関わらず、それらが見られなかったのは残念。社会的なメッセージ以外のものも含めて、さまざまな表現が同時に存在するのがデザイン部門の本来の姿では。とはいえ全体的に力の入った作品が多く、審査が楽しかった。

【一席 部門大賞・知事賞】

社会的メッセージを、目線を下げて表現している。メッセージは辛辣だが、見た目はかわいらしく楽しげに見える。そのメッセージを読み解くのはそれほど難しくはないが、初めはそれに気付かず通り過ぎてしまうかもしれない。その後、メッセージに気付いた人はショックを受ける。気付く前と後の2面性が魅力的。イラストレーションのクオリティが非常に高い点も高く評価できる。

【第二席 兵庫県立美術館賞】

三宮で起こった出来事を取り上げており、メッセージが伝わりやすい。こちらに向かってくるシマウマに迫力があり、画力も表現力も優れている。画面からは若いエネルギーを感じるほどである。時間のかかるメディアを用いて、ここまでの精度のものを描こうとし、成し遂げた点は評価に値するが、絵としての課題を感じる部分もある。

【第三席 神戸新聞社賞】

気の遠くなるような根気が必要な作品であり、非常に強いエネルギーを感じる。ボールペンで細かく画面を埋め尽くす表現は今の流行りだが、この作品は、根気だけでは成し遂げられない綿密な構成力があり高い意識を感じる。あえて具象的でないパターンが魅力的ではあるが、惜しむらくはどのような意図で表現したのか伝わりにくい点。将来に期待したい。

【第四席 (公財) 兵庫県芸術文化協会賞】

ひとつひとつのアイデアが的を射ている。レタリングも絵も全て手書きという点も評価したい。特に浮世絵師の名前を表現した文字の完成度が高く、招き看板の制作をされて

いる方ではと思うほど。デザインとしては、文字が多すぎる点と処理方法に課題があるが、べたな表現を敢えて用いてパロディーにしているとも考えられる。

【奨励賞 （公財）伊藤文化財団賞】

色が鮮やかでないにも関わらず、他の作品に埋もれず記憶に残る作品。デザイン部門の絵画表現には、今までの絵画表現とは異なる新しい表現が出てくる。完璧ではないが、新たに始動する何かを感じる。イラストレーションでありながら、人物というより、鬱々としながら聖なるものに憧れる気分や空気感が表現されており、そこにオリジナリティを感じる。